第5回大学教育改革フォーラム

大学授業をどう変えるか ── 研究から実践へ ──

Faculty Development を超えて

開　会　の　辞

荻　野　文　丸（京都大学高等教育教授システム開発センター長）

それではちょうど定刻でございますので、第5回大学教育改革フォーラムを開きたいと思います。

私は、京都大学高等教育教授システム開発センター、非常に長ったらしい名前なので、いつも覚えるのに苦労するのですけれども、略称は高等教育センターと呼んでおります、そこのセンター長をしております荻野と申します。本日はこのフォーラムに、こんなにたくさんご参加いただきまして誠に有り難うございます。厚く御礼申し上げます。

このフォーラムは、高等教育センターの設立趣旨、あるいは目的、そういったものを、学内のみならず学外、社会に発信するということを目的にして開いているものです。毎回いろいろなテーマを決めて、そのテーマの第一人者においでいただき、お話を伺う。その後、そのテーマについていろいろと研究をなさっていらっしゃる先生方に話題提供をしていただき、そして、みなさんと一緒にディスカッションをするという体裁で進めて参りました。今回もそのように進めていきたいと思っております。

今回は大学授業を取り上げております。後で、趣旨説明、講師紹介がありますけれども、大学の大衆化であるとか、あるいは学生の学力が最近落ちてるぞ、といったようなことが言われているわけです。その原因等はいろいろあるとは思いますが、その中のひとつの断面である授業というのを取り上げております。このセンターでもその授業、何と言いますか、今までは授業についての研究は大学の先生がやっていて、実際に授業をやるのは小学校、中学校の先生方であるというようなことであったわけですけれども、大学の授業は研究者自らが実際に授業をやるということであるわけで、このセンターでは特にそういう面に力をおいて、公開実験授業を3年ほどやって参りました。その成果をもとにして、皆様と本日ディスカッションをしていただこうというのが、大筋の趣旨で、もう少し詳しいことは、後で田中先生からお話が伺えるものと思います。

簡単ではございますが、これでもって開会の辞とさせていただきます。

本日は京都大学総長の長尾真先生においでいただいておりますので、長尾先生からご挨拶を賜りたいと思います。